

大学助産師養成課程における「相手の生活に关心を寄せる」能力の向上を目指した実践
 Practice of improving the ability to “take an interest in the other person’s life” in midwifery
 training course in university
 中島 奈美¹⁾²⁾ 原田幸恵¹⁾ 前田絢子¹⁾
 Nami NAKASHIMA Yukie HARADA Ayaka MAEDA

京都府立医科大学 1) 熊本大学大学院 2)
 Kyoto Prefectural University of Medicine Kumamoto University Graduate School

<あらまし> 助産学生の「相手の生活に关心を寄せる」能力向上を支援する意図で,在宅での学習活動を行った。方針と学習目標を定め,安産に向けた生活に関して個人学習,ペア学習,グループ学習を行った。評価できない学習目標があり,方針と学習目標を修正した。それを用いて再評価すると,個人学習後のペア学習と関連図作成,グループ学習に効果的であった。また,相手の生活に关心を寄せるためにペア学習は不可欠であると考えられた。助産学では実習場所の確保が難しくなっていくため、今回の実践は,実習機会を有効にする教材設計に示唆があったと考える。

<キーワード> 教材開発 遠隔教育・学習 授業設計 大学教育 看護教育

1. はじめに

本邦では看護系大学の増加に伴い,助産師養成施設は増加している。一方で出生数は減少が著しい。この相反する現象に伴い,助産学に関する実習施設の確保が困難になっている(表1参照)。

担当する助産学妊娠期の科目は,目標に保健指導を行う能力の習得をあげている。看護を行うには,相手のこれまでの生活を感じ,これから的生活を考える必要がある。しかし,相手の生活を感じ,考えることに課題がある学生が少なくない。

専門性に根差した生活経験を増すこと,相手にとっての生活の意味を考える機会をもつことで「相手の生活に关心を寄せる能力」の学習支援ができるのではないかと考えた。

あわせて COVID-19 の感染拡大によって,在宅で学習を進める必要性に迫られた。今後,実習場所確保の深刻化は続いている。そのことを踏まえ,貴重な実習機会がより有効になるように臨床以外の学習の可能性を拓く,新たな教材設計につなげたいと考える。

表1 出生数と助産師養成校の10年の推移

西暦(年)	2008	2018
出生件数(件)	10,700,036	918,400
養成校数(校)	154	209

2. 実践の概要

2-1 実践計画の方針と意図

今回は以下の方針であった。

①在宅で感染予防対策が守れる内容にする。
 ②妊娠期保健指導に関する生活経験を増やす。
 ③抽象的なものを,生活という具体化の場へ繋げる経験にする。
 方針の③は、「安産」をテーマにした。「安産」は助産学では定義がない。しかし汎用され,分かったような気になる抽象的な言葉であり,ふさわしいと考えた。

2-2 目標と方法と実践

はじめに個人学習を行い,次にペア学習,グループ学習を行った。それぞれに目標をあげた(表2参照)。個人学習では,妊娠39週の妊婦になりきって安産に向けた生活(以下安産生活)を3日間行い,レポート作成を求めた。その後のペア学習は,電話で相手の安産生活を聞き取りレポートにすることを求めた。グループ学習では,ペア学習の報告を共有し,他のペアの報告から気づいたことの記入を求めた。

2-3 実践時期と対象

時期は,2020年3月末から1ヶ月であった。対象は,大学助産履修生新4年生の10名であった。

3. 結果と考察

3-1 目標評価

表2に挙げた目標を学生レポートの記述から評価する。目標a.b.c.は全員が達成できた。d.f.は「学びを定着」「気づきを定着」がレポートでは観察評価ができない。e.は2名が達成できた。6名が一部達成,2名が達成できていなかった。

表2 学習方法と目標

個人学習の目標

- a. 「安産」についてオリジナルの経験をする。
- b. 生活経験を増やし「生活」の意味を考える。
- c. 「安産にむけた生活」を経験をもとに言語化できる。

ペア学習での目標

- d. 「自分の安産生活」を相手に伝えることで、自身の学びが定着する機会にできる。
- e. 「相手の安産生活」に関心を寄せ、その内容を専門用語と自分のことばであらわせる。

グループ学習の目標

- f. ペア学習での他者の気づきを知って、自身の気づきを定着し、深める

3-2 方針と目標について

今回評価できなかった目標は、修正する必要があった。また原因は、方針③の曖昧さにあったと考える。

学生の、生活についての記述に“生活は自分の考えていること、大切にしていることが現れている”“その人の性格や、習慣…価値観の現れ”等があった。また、2名の学生が、安産生活の方法と目的を関連図で示した。この2名は、評価可能な目標を全て達成できていた。これを参考に方針は「生活と価値観、習慣の関連が理解できる」「安産生活の方法と目的の構造を理解できる」に修正した。看護学矛盾論の「わかった像(図1)」が形成できることを意図した。統いて方針に基づいて目標を修正し表3のようにした。

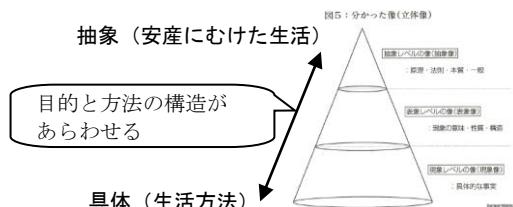


図1 看護学矛盾論「わかった像」と目標の関係

3-3 目標の再評価と方法の検討

目標を修正し、全ての項目が評価できた（表3参照）。目標 b. ではペア学習、グループ学習に効果があった。目標 b. と d. は関連しており、学習方法として、関連図の作成、ペア学習に効果があると考えられた。

今回の実践をコループの経験学習サイクルに当てはめると、「具体的な経験」は、個人学習があたる。今後は、ペア学習、グループ学習の中で「内省的観察」「抽象的概念」「能動的実践」が行われていたか、関連図作成との効果が、検討可能な評価法を組み込む必要がある。

実践の目的は「相手の生活に関心を寄せる」能力の支援であり、これはその実体験としてもペア学習は不可欠であると考える。

3-4 生活経験と相手への関心

学生の記述には“献立をたてることなど行ったことがなかった”“母に教えてもらいながら家事を行った”等の記述があり、生活経験を増す機会にできた。そして、“妊婦さんが生活する上で何に重きを置いているか考えたことがなかったが、これによって生活や行動が大きく変わると気がついた”“妊婦さんがよくない生活を変えられないときは、妊婦さん自身もつらいのではないかと思う”等の記述より今回の方法が、「相手の生活に関心を寄せる」能力の支援なったと考える。

表3 修正した学習方法と目標の達成人数(人)

学習全体での目標	学習機会		
	個人	ペア	グループ
a. 経験をもとに「生活」の意味を言語化できる	10	0	10
b. 相手の「安産生活」を専門用語と自分のことばであらわせる。	0	2	3
個人学習の目標			
c. 「安産生活」を模擬経験をする。	10		
ペア学習での目標			
d. 「安産生活」の目的と方法の関連図が書ける。	2		
グループ学習の目標			
e. ペア学習での他者の気づきから、自分の気づきの良い点、発展できる点が見いだせる	10		

4.まとめと今後の課題

助産学生の「相手の生活に関心を寄せる」能力の学習支援意図したを実践した。学生の記述から一部学習効果が認められた。個人学習後のペア学習と関連図作成、グループ学習の効果が考えられた。今後の実践では、経験型学習モデルの学習内容と関連図作成の効果を検証し、教授方法の効果を評価していく。

参考文献

- 三瓶眞貴子（2010）看護学矛盾論-unification- 第2版、金芳堂